

# 他責、知ったかぶり、印象操作…

オールドメディア≡嫌われる文章の今

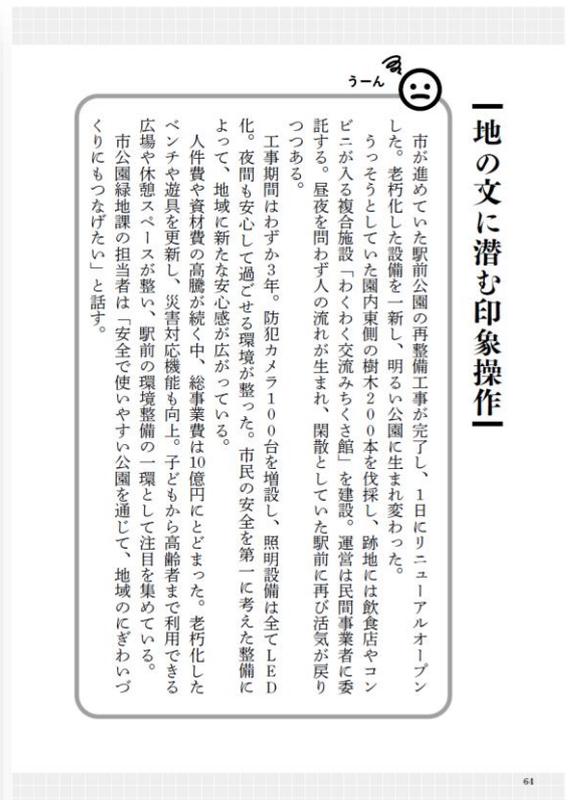
元朝日記者×元毎日記者が我が身を振り返って導く

## 『嫌われる文章』

読み手をイラつかせないために覚えておきたい51のルール』

JTBグループで旅行・ライフスタイル情報を提供する株式会社JTBパブリッシング（東京都江東区、代表取締役 社長執行役員：盛崎宏行）は、2026年2月25日（水）に『嫌われる文章 読み手をイラつかせないために覚えておきたい51のルール』を刊行しました。

本書はSNSなどの普及を背景に「1億総炎上時代」となった現在、特に厳しい意見にさらされがちな「オールドメディア」の元記者が、自身の経験も踏まえながら嫌われる文章の例文を挙げ、解説と改善点を提示するものです。日常生活やビジネスシーンの何気ないやりとりからニュースや不祥事の際の謝罪文まで扱い、1項目4ページで読みやすく分かりやすい構成になっています。



④嫌われる文章の一例（本書より）

⑤書影

**解説**

カギ括弧でくくる人物の発言や引用ではなく、筆者自身が説明や描写をする文は、新聞づくりの現場で「地の文」と呼ばれています。出来事の詳細や背景、流れなどを説明するうえで、地の文は不可欠の存在。しかし書き方一つで、読み手が受ける印象は大きく変わります。特に事実を文章で正確に伝えなければならぬときに、自分の評価や感情がまじっていないか、注意が必要です。

とういうことか、例文を見てみましょう。公園の再整備を報じる新聞記事でイメージしました。一見、事実を淡々と伝えているようで、所々に筆者の評価が地の文に入り込んでいることがわかります。

例えば、「工事期間はわずか3年」「総事業費は10億円にとどまった」といった数字に開く部分です。同じ数字でも「わずか」と書けば「短期間でよくやった」という肯定的な印象に。「3年もかかった」と書けば「想定より時間を要した」という否定的な印象に変わります。同様に、「10億円にとどまった」と「10億円にのぼった」では、読み手が受け取るニュアンスは異なります。

数字以外でも、表現には注意が必要です。2段落目にある「うっそうとしていた……樹木」という描写も「木々が茂る落ち着いた一角」と言い換えると、印象は変わります。例文には、他にも「明るい公園」「活気が戻りつつある」「安心感

が広がっている」といった表現が目立ち、筆者が整備をポジティブに受け止めていることが見て取れます。

確かに、公園の再整備を喜ぶ人は多いでしょう。しかし、一つひとつの内容を見ていくと、市民の受け止めは一概ではないはず。例文には「防犯カメラ100台を増設」したことで「夜間も安心して過ごせる環境が整った」とありますが、「監視されているようで落ち着かない」と感じる人もいるはず。樹木の伐採に関しても、跡地に複合施設ができたことを歓迎する人がいる一方で、「日陰が減ってしまう」「環境破壊が」と捉える人もいます。

書き手が「再整備は良いことだ」と直接書かなくても、評価がまじった言葉が積み重なると、読者が記事から受ける印象を結果的に方向づけてしまいます。例文のように事実を淡々と伝える記事の場合、地の文はやはり事実の説明に徹するべきです。同じ出来事を受けていても、地の文の書き方によって読後の印象はまったく変わります。「評価がにじんでいないか」「この形容詞は適切か」といった視点で、一度自分の文章をできる限り客観的に見直してみる。そうすることで、事実をフェアに伝える文章になるはず。

①解説  
②改善した文章

本書ではさまざまな用途、シチュエーションでの嫌われる文章のポイントを51項目用意。カタカナの羅列や丁寧すぎる言葉遣い、感情の暴走など「自分は大丈夫」と考える人にも思いがけない気づきがあります。また昨今批判を集めたさまざまな文章について、なぜそうなったのかも解説。インターネットの広がりや文章に触れない日がなくなった現在、文章との向き合い方を考えるきっかけにもなります。

なるほど



市が進めていた駅前公園の再整備工事が完了し、1日にリニューアルオープンした。工事期間は3年で、老朽化した遊具や設備の改修を中心に進められた。園内東側の樹木200本を伐採し、跡地にレストランやカフェ、コンビニが入る2階建ての複合施設「わくわく交流みちくさ館」を建設。運営は民間事業者に委託する。駅前を含めた公園一帯の活性化が目的で、市は1日800人の利用を見込む。

安全対策として、防犯カメラを100台増設し、照明設備は全てLED化した。防犯対策が図られた一方で、プライバシーの侵害を懸念する声もある。市公園緑地課の担当者は「犯罪抑止の目的を市民に丁寧に説明し、記録データは厳正に管理していく」と話している。

総事業費は10億円。人件費や資材費の高騰を受け、計画段階から3億円の増額となった。費用の内訳は、公園整備が4億5千万円、複合施設の建設が約3億円、防犯設備や照明の更新が約1億5千万円など。同課の担当者は「資材価格の上昇を反映したもので、増額はやむを得なかった」とし、一方で、「安全対策や災害対応機能の強化に充てており、ご理解をいただきたい」と説明している。

<書誌概要>

- 【書名】『嫌われる文章 読み手をイラつかせないために覚えておきたい51のルール』
- 【著者】諸星晃一
- 【定価】1870円(10%税込)
- 【仕様】四六判並製(縦188×横128)、232ページ
- 【発売日】2026年2月25日(水)
- 【発行】JTBパブリッシング
- 【販売】全国の書店、ネット書店

Amazon ➡ <https://www.amazon.co.jp/dp/4533170668/>

<お問い合わせ先>

JTBパブリッシング ブランド戦略室 [pr-team@rurubu.ne.jp](mailto:pr-team@rurubu.ne.jp)